朝日遺跡60C区方形周溝墓ＳＺ01について

丹羽　博

1

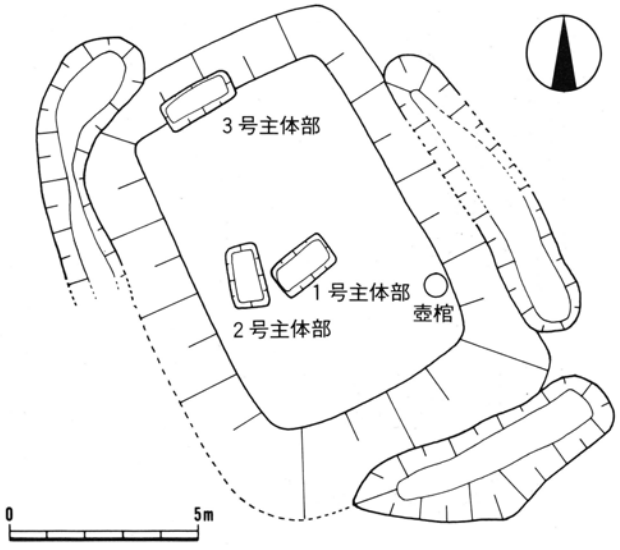
朝日遺跡にて、60年度に調査した方形周溝墓の内、C区のＳＺ01[1]より人骨の遺存した主体部３基を検出した。その内最も保存状態の良好な人骨１体について、池田次郎氏に鑑定を依頼した。本年報にその報告を掲載するに際し、まずこのＳＺ01の調査所見について記す。

2

60C区でほぼ全容を明らかにすることが出来たＳＺ01は、台状部長軸13m・短軸10mを測る長方形を呈する。西北を除く各コーナーに陸橋部を有する幅1.5～2.5mの周溝が廻る。西溝南半は浅く、溝底は基盤のシルト層に達していない。西北コーナーと東溝北端の周溝内より、それぞれ細頸壺を検出した。マウンドは中期の包含層上に盛土により構築され、周溝底とマウンド現存頂部の比高は1.3m程である。埋葬施設として土壙3基と土器棺１基を検出した。これらは盛土中に構築されており、１号主体部は２号主体部に先行する。

１号主体部　マウンドほぼ中央に位置し、当周溝墓の中心主体と考えられる。長軸1.7m・短軸9.2m・深さ0.4mを測る墓壙で、その長軸は周溝墓の短軸に近似する。墓壙内両小口に小溝が存在することから、組み合わせ式の木棺の使用が想定される。人骨は状態不良ながら遺存しており、頭位を東北に向けた仰臥屈葬である。

２号主体部　１号主体部の西側で検出され、長軸1.6m、短軸0.9mの墓壙で、おそらく２体と思わ



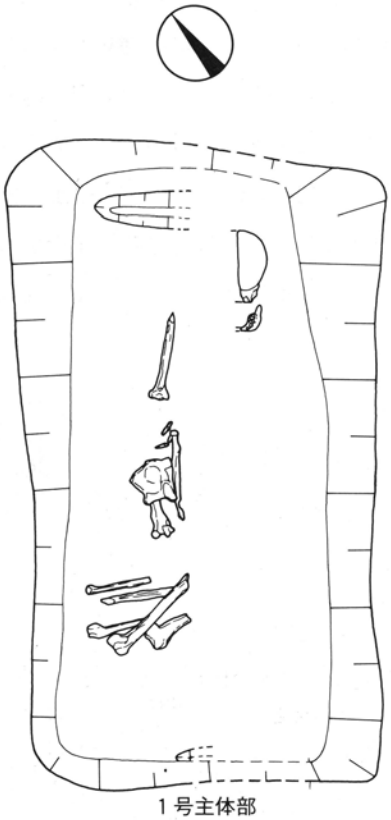
第１図　60C区SZ01平面図（１：200）

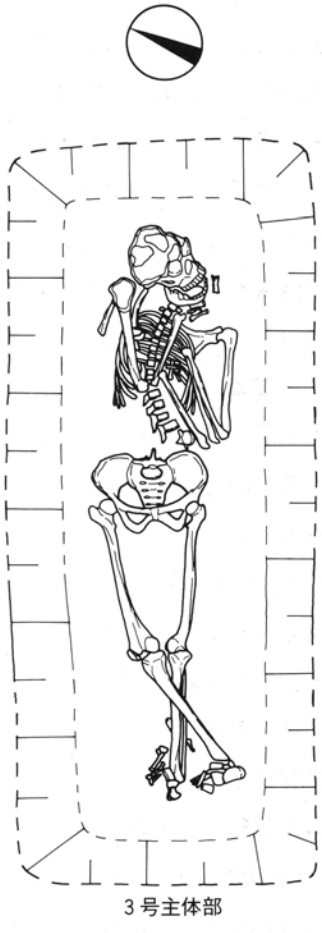




▲ 3号主体部

◀ 2号主体部





第2図　60C区SZ01主体部平面図（1：20）

れる頭位を南西に向け仰臥屈葬で並行して合葬された人骨を検出した。下肢骨は強く曲げられ折り重なる様にして遺存しており、同時に埋葬されたものと思われる。

3号主体部　マウンド北縁辺で検出された主体部で、平面プランは確認しえなかったが、東西に長軸を有する幅80cmの墓壙で、埋土の観察から、木蓋等の存在が推定される。当主体部の埋葬人骨の遺存状態は3主体部中最も良好で鑑定を依頼した。頭部を東北に向けた伸展葬である。

土器棺　主体部1の南東に位置する。胴部最大径50cm程の大型壺を使用し、頸部以上を欠落させ、底部中央に二次穿孔を施し水平に埋置される。蓋は確認されず、また棺中より人骨等は検出されなかった。

3

ＳＺ01の築造は、土器棺及び周溝内出土の土器より、尾張地方に畿内的要素の波及によって新たな土器群が成立する高蔵式期（中期末）でも早い段階に位置づけられる。

現在までに朝日遺跡で検出されている埋葬人骨のうち、葬位が明らかなものは、貝殻山地点の前期例(2)を含め屈肢位が12例中10例と主体をしめ、今回のＳＺ01の伸展位は最も初期の例となり、本来屈肢位が伝統的な朝日遺跡で、当周溝墓内にて3号主体部が伸展位であること、台状部縁辺部に埋葬されていることは、この被葬者の性格を示唆しているものと思われ、この時期の土器棺に周辺地域の土器が多々見られることと合わせ(3)、当時期の周辺地域との関係を推考する上で参考となる。

又、1号主体部でその痕跡から組み合わせ木棺が当期に使用されていることが判明したが(4)、従前の調査にて中期前半の周溝墓の主体部と推定される土壙の両小口に落ち込みが確認されている例があり(5)、その使用開始がこの段階まで遡る可能性もある。

ＳＺ01が築造された中期末は、前述した土器に見られる変容のみならず、集落構造においても大きな画期となる時期であり、当周溝墓はこの時期の朝日遺跡を考える上で一助となろう。

〔注〕

(1)　ＳＺ01の位置については下記文献を参照
『年報　昭和60年度』　愛知県埋蔵文化財センター　1986

(2)　『貝殻山貝塚調査報告』　愛知県教育委員会　1972

(3)　知多半島から三河西部にかけて分布する獅子懸式・古井式の大型壺のみの例や、高蔵式と獅子懸式・古井式とを棺身↔蓋として組み合わせるものが多々見られる。このように土器棺に他地域の土器が使用される現象を、都出比呂志はその被葬者もしくはその縁者の出自と関連づけて理解しているが、当地域においても、高蔵式がそれまでの在地性を一変させるかのごとく波及している現象を、各地域間におけるさかんな人的・物的交流を媒体として捉えた時、その結果として土器棺に見られるこの様な現象を理解できるのではないだろうか。
都出比呂志　「弥生土器における地域色の性格」　『信濃』　35巻4号　1983
都出比呂志　「墳墓」　『日本考古学』　岩波書店　1986

(4)　春日井市勝川遺跡では、当期の棺材と推定されるコウヤマキの板材5枚セット2組が、集落中の作業場的空間から土坑中に貯蔵された状態で検出されており、この時期にはコウヤマキに限らず、組み合わせ木棺が当地域においても使用されていたことはほぼ確実であるが、実際に確認された例はない。
石黒立人　「勝川遺跡出土の大型板材について」　『勝川』　愛知県教育サービスセンター　1984

(5)　県教育委員会の調査によるＳＸ097の主体部と思われるＳＫ157の両小口に落ち込みが確認されている。
『朝日遺跡』　愛知県教育委員会　1982